田淵寿郎（たぶちじゅろう）

計画はできても実行しなければ意味がない

－戦後名古屋の復興計画の牽引者－

田淵寿郎（1890 ～ 1974）
出典：『名古屋都市計画史』1999

■造船志望から土木技師への進路変更
―国内各地の主要河川事業に尽力する―

1890（明治23）年広島県佐伯（さえき）郡大竹町（現大竹市）で生まれた。実家は回船問屋「鍵屋」で多くの船を所有していたが、明治維新の激動期のなか家業は衰退し長兄のいる大分県杵築（きつき）で育つ。旧制第五高等学校（現熊本大学）から東京帝国大学（現東京大学）の土木工学科に入学。卒業時は、世界的不況により志望した造船業界は低迷していたため、仕方がなく土木の道に進んだという。1919（大正８）年卒業後、山形県庁に採用されて最上川の改修事業にあたる酒田事務所の所長として赴任した。1917（大正６）年11月京都府に転任。1921（大正10）年には、再び山形県鶴岡市に転任。『或る土木技師の半自叙伝』には、東北の人たちとの交流が語られており、ただの土木技師ではなかった一面が窺える。1935年（昭和10）年、大阪土木出張所の工務部長として勤務後。1936（昭和11）年、仙台土木出張所長として三度目の東北勤務を担う。1937（昭和12）年各地の主要河川事業に尽力するなか、日中戦争がはじまり、中支派遣軍特務部付きとして中国に赴く。

移転中の平和公園　　写真：乾徳寺所蔵

■都市計画の名作「名古屋100m道路」
―例がない大胆な計画「田淵構想」―

1939（昭和14）年、名古屋土木出張所長として転任。木曽三川の治水、今渡ダムの操作規程などの河川工事に関わる。1942（昭和17）年、華北政務委員会建設総署代理として再度中国に赴く、北京西郊の都市計画の立案に参加した。この二度目の中国で「土木技師としては、多くを学んだ」と著書に書いている。1945（昭和20）年10月、名古屋市長からの招請により、技監兼施設局長となり戦災復興計画立案に取り組む。技術的助役として統一的な復興事業を牽引したのである。田淵の熱意は、日本の都市計画史上例がない大胆な「田淵構想」とも称された名古屋市復興計画の実現に邁進した。その計画の基幹には、2本の100m道路と大規模な墓地の集団移転による平和公園の建設があった。計画の実行には、市内中心部に279の寺院があり、およそ18万余基の墓碑移転が重要課題であったが、田淵の熱意とリーダーシップにより平和公園という墓地公園が実現した。田淵は、名古屋市の戦災復興計画を中心として、名古屋港の県市共同管理の実現と整備拡充を推進、さらに広域的行政、特に、東海三県の中心都市として名古屋の位置を常に考え、名古屋の発展に関わる施策を次々と実現していった。令和元年、名古屋市は市政施行から130周年を迎えた。その長い歴史の中で名古屋市名誉市民の称号を与えられたただ一人の人物が、田淵寿郎である。

（梅本良作）

現在の久屋大通り１００m道路　　写真：鈴木吉正